

兵道町の文化財めぐり



発刊にあたって

それぞれの地域ちいきにそれぞれの歴史があるように、私たちの宍道町にも現在につながる連綿れんめんたる過去かこの歩みがあります。あるものは宍道の地域性きいんに起因きんしているでしょうし、またあるものは世界史的潮流せかいしてきちやうりゆうの中で起こりえたものでしょう。

私たちが自分たちの祖先の歩みを調べるのは、単に過去に対する郷愁きやうしゆうのみではなく、過去の人たちが歩まねばならなかったその道が、現在に生きる私たちの生活を大きく規定きていしており、そして未来に向かって歩む道を絶えず示唆しきしていると考えからず。

しかし、過去の膨大ぼうだいな記憶きおくをすべて現在まで引き受けることはできませんので、私たちは、私たちの祖先が残り続けてくれた生せいの痕跡こんせきを手がかりに過去の歩みを再構築さいこうちくしていかねばなりません。

今回のふるさと文庫『宍道町の文化財めぐり』は宍道町にある指定してい文化財を中心にまとめてみたものです。宍道の歴史と特殊性とくしゆせいを明らかにするにはほど遠いものがありますが、その一端でも知り得ていただければ幸いに存じます。

編集するにあたっては、1) 読みやすい 2) 内容が正確である
3) 手に入れやすいということを考えました。

目 次

	ページ
原始・古代の宍道町……………	1
中世の宍道町……………	5
近世の宍道町……………	7
古代特殊横帯文銅鐸……………	9
椎山 1 号墳……………	10
伊賀見 1 号墳……………	11
水溜古墳群……………	13
随音寺横穴墓群……………	14
犬石・猪石……………	15
木造毘沙門天立像……………	17
伝大野次郎左衛門墓……………	18
木造阿弥陀如来像……………	22
宍道伊予守遺物九条大袈裟……………	23
三条宗近銘太刀……………	25
金山要害山……………	26
木製波涛文透彫欄間……………	28
久戸千体地藏……………	29
伊志見一里塚……………	31
輪転式一切経経蔵……………	32
木幡家住宅……………	34

飛	雲	閣	36	
木	幡	山	荘	37
菅原道真	と	天神さん	38	
岩	屋	寺	40	
妙	岩	寺	41	
伝統的工芸	来待石の採石・加工	42		
お	わ	り	に	44
宍道町のおもな文化財と展示施設	46			
宍道町の文化財地図	49			
宍道町歴史年表	51			

(表紙の写真は、重要文化財「木幡家住宅」)



げんし こだい
原始・古代の宍道町 (旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代)
 あすか なら へいあん
 飛鳥時代、奈良時代、平安時代)
 きゅうせっきじだい
宍道町の旧石器時代

じょうもんじだい
 縄文時代以前の、人類最古の文化段階を旧石器時代とよびます。宍道町畑の首谷遺跡より旧石器が見つまっていることから宍道町でも縄文時代以前に人々が生活していたことが知られています。

じょうもんじだい
宍道町の縄文時代

縄文時代は、人々が土器（縄文土器）、磨性石器、弓矢などの使用を始めた時代で、今から約一万年前に始まりました。鹿や猪などの狩猟、漁撈、貝や木の実の採種などによって生活していたことが知られています。

こうちやうじ
 宍道町弘長寺の弘長寺遺跡から石でつくった斧が、同じく弘長寺の三成遺跡や下白石の伊野谷遺跡からは縄文土器がみつかっています。

やよいじだい
宍道町の弥生時代

今から2,000年程前になると人々は大陸から伝わってきた米作りを始め、縄文土器より焼きの良い弥生土器を作り始めます。水田を作り米を作

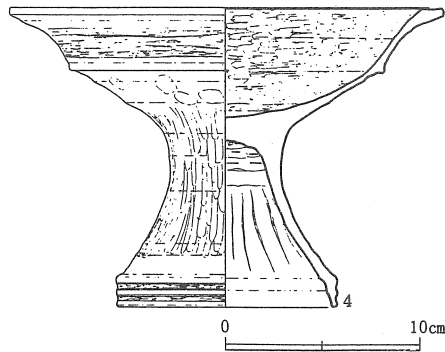


図1 弥生土器（矢頭遺跡より）

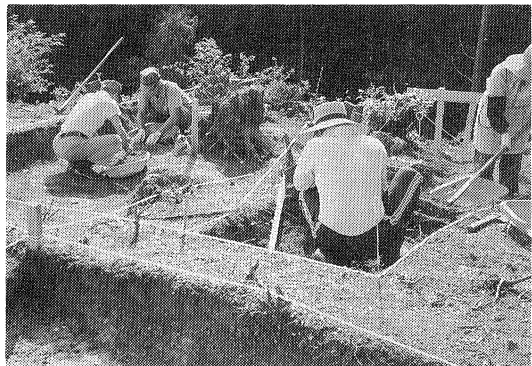
るようになると治水工事をしたり、米を管理したり、豊作を祈るお祭りをするために、一部の有力者が出てくるようになりました。

となりの斐川町の荒神谷遺跡からみつかった多くの銅劍、銅矛、銅鐸は弥生時代のお祭りの道具ですし、安来市、松江市、鹿島町、出雲市でみつがっている「四隅突出形墳墓」と呼ばれるお墓は、当時の有力者のお墓です。宍道町では弘長寺の三成遺跡や岡目の平田遺跡から弥生土器がみつがっていますし、才の矢頭遺跡からは弥生時代の建物跡がみつがっています。

古代特殊横帯文銅鐸

宍道町の古墳時代

今から約1,600年ほど前（紀元4世紀の初め）、古墳時代になると弥生時代に見られた一部の有力者はさらに大きな力を持つようになりました。この地方の有力者と同盟を結びながら、大和（今の



写1 発掘調査のようす

奈良県)を中心に統一勢力が出現するのです。そして権力の象徴として、また首長交替の儀式を行うために大きな古墳（お墓）を作ります。古墳には前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳等があり大和を中心に全国に分布しています。

古墳の中には、^{せっかん}石棺や^{もっかん}木棺、^{せきしつ}石室を作りその中
に^{かがみ}鏡、^{たま}玉、^{けん}剣などの^{ふくそう}副葬
^{ひん}品とともに死者を葬ります。
宍道町では^{しいやま}椎山1号
墳と呼ばれる全長35mの
前方後円墳が^{したぐら}下倉でみつ
かっています。また^{おだ}萩田
の^{あしがしら}足頭古墳群では朱を塗
った石棺が、上白石の下
の^{そら}空古墳、下白石の^い伊賀
見1号墳、^{かがみきたざこ}鏡の鏡北廻古
墳などからは^{よこあなしきせきしつ}横穴式石室
が発見されています。

^{みずたまり}水溜古墳群、^{しいやま}椎山1号墳、
^い伊賀見1号墳、^{ずいおんじ}随音寺横
穴墓群

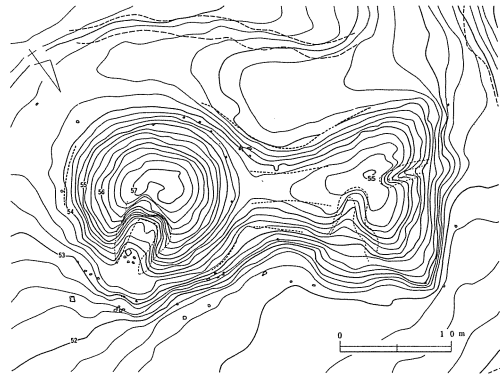


図2 椎山1号墳の測量図

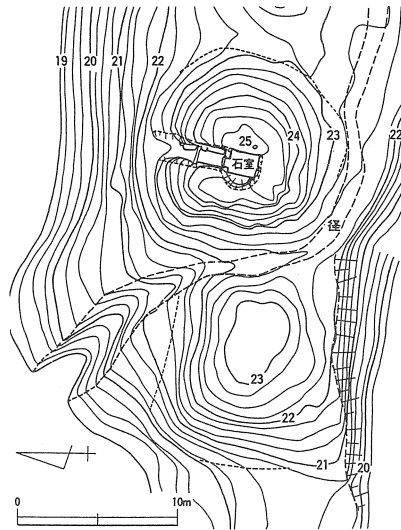


図3 伊賀見1号墳の測量図

宍道町の^{あすか}飛鳥時代、^{なら}奈良時代、^{へいあん}平安時代

古代の宍道町の地誌は天平5年(733)の「出雲国風土記」にくわ
しく^{しる}記してあります。それによりますと、現在の宍道町は^{おうぐん}意宇郡の^{しし}宍

道の郷、宍道駅、拝志郷および出雲郡の建部郷の一部で形づくられていました。当時の戸数は約100戸、人口にして2,500人程度と推定されています。

その頃の駅家は公用の使者の駅馬を備えた施設で、30里（古代の里、今の16Km）ごとに設置され、駅長1名、駅子・伝子がおかれ、駅田2町、駅馬5匹が配されていました。この駅家のあったところは現在の佐々布下あたりであったろうと考えられています。

当時の人々の食生活を「風土記」から推測してみると、飯（今の強飯）、粥（今のご飯）、ムギ、キビ、アワ、ヒエなどや、野生のウド、ヒル、セリなどを食べていたようです。また、来待川には「年魚（アユ）あり」、宍道川（佐々布川）には「魚なし」とも記してあります。

さて、古代の人々の精神生活をあらわすものに、現在も残る神社があります。宍道社（今の石宮神社か）、支麻知社、佐久多社、宇由比社、狭井社、狭井高守社、伊自美社が風土記に記載されており、このうち宍道社、支麻知社、狭井社、狭井高守社、伊自美社が官社でした。

また、宍道町の小松地区では平安時代の人々が使った器のの窯跡がみつかっています。

犬石・猪石、木造毘沙門天立像、菅原道真と天神さん

ちゅうせい
中世の宍道町

(へいあん かんまくら むろまち あずちももやま
平安末期・鎌倉時代・室町時代・安土桃山時代)

平安時代の終わりごろから律令制の基礎となる公地公民制は次第に崩れ、10世紀以降には土地を有力者が個人でもつ荘園制が展開していきます。この地域でも当然、影響があったと考えられますが、宍道町に関する荘園資料は極めて少ないため、その詳しい内容はわかりません。

鎌倉時代になると武士の世の中になり、その支配の方法として各国に守護、その下に地頭をおきます。中世においては、この出雲地方でも守護、地頭はたびたび代わるのですが、出雲守護佐々木氏の支配下になりますと、文永8年(1271)11月の「千家文書」に当時の宍道周辺の様子がうかがえます。

……宍道郷38町8反35歩・成田四郎、拝志郷21町4反・大西、伊志見郷8町3反180歩・杵築大社、佐々布郷20町2反半・佐々布左衛門入堂子、来海庄10町・来海庄内10町・別府左衛門妻……の記録が残っており、この成田、大西、佐々布の各氏は在地の地頭です。村の支配者の多くは地侍で、他に下倉の山本氏、上来侍の犬山氏などがいました。

室町時代・南北朝期をすぎると、この地方は宍道氏という有力な一族の支配下におかれました。宍道氏は出雲国守護京極高氏(道誉)の孫秀益(秀兼)が宍道八郎と称したのに始まります。室町幕府の中で役職をつとめつつ、戦国大名尼子氏の有力家臣として姻戚関係をもつなど、大きな勢力をもっていました。しかし、天文十一年(1542)

おおうちよしたか
大内義隆が尼子氏攻略のために進出するとその軍門に入り、大内氏が
尼子氏に敗退すると、それに従って宍道の地を離れます。

大内氏に代った^{もうり}毛利氏が再び尼子氏攻略をおこなうと、宍道氏はこれに従います。そして、^{えいろく}永禄9年（1566）、この戦いで毛利氏が勝利をおさめたことにより、宍道氏は宍道とその周辺を再び支配することになりました。その後、宍道氏は毛利氏の政策により、天正二十年（1592）頃に^{ながとくに}長門国へ移封させられたことが知られています。

でんおおのじろうざえもんのほか ^{もくぞうあみだによらいぞう} 木造阿弥陀如来像、^{かなやまようがいさん} 金山要害山、
しんじいよのかみいぶつくじょうおおげき ^{さんじょうむわちかめいたち} 三条宗近銘太刀、^{もくせいほうもんすかしほりらんま} 木製波涛文透彫欄間、
^{くとせんたいじぞう} 久戸千体地蔵



写2 空から見た金山要害山

近世の宍道町

(江戸時代)

江戸幕府が開かれ、近世となると出雲の国の領主は堀尾氏、京極氏、そして幕末まで続く松平氏へと移ります。

松江藩は郡部の統治は郡奉行をおいて民政にあたらせる一方、地方役人をおいて勸農、収税を確実にしようとしました。郡奉行の下には下郡、与頭、目代の郡役人がいました。意字郡は下郡1名、与頭3名で郡役所は乃木村にありました。郡役人は農民出身ではあっても地方の名家で、資産がある者に限られ、地位は世襲的でした。

宍道町での下郡格は木幡、小豆沢、葉山、永原、犬山の各家でした。当時、この町は宍道村、白石村、伊志見村、佐々布村、西来海村、東来海村、そして上来海村に別れており、それぞれ庄屋、年寄(組頭)ら、百姓代の村方三役がいました。下郡の給米は20俵3人扶持、庄屋は収税100石につき5斗5升5合の給米の規定がありました。

当時の「検地帳」や「差出帳」によって当時の検地の様子を知ることができます。それによると、元禄12年(1699)の検地では宍道村は石高389石余、田畑27町余、戸数161、人口775人で、寛延2年(1749)には戸数280、人口1,200人に増えています。ちなみに宝暦年間(1751~1764)の宍道の石高は宍道で390石、白石で1,230石、佐々布で840石、伊志見で240石、東来待で790石、上来待で1,160石、西来待(記載なし)でした。

宍道は古代から交通の要衝でしたが、近世に入ると益々その重みを

増してきます。大原・仁多・飯石の奥出雲からいろいろな物資を松江に運ぶ際には宍道を経由しましたし、それらの道を往来する人々によって宿場町として栄えました。3軒の本陣宿と、元禄12年(1699)の宿屋4件、舟32艘の記録がこれを示しています。「宍道湖」という名前も近世末から、明治時代にかけて定着するのですが、これも近世宍道の交通による繁栄ぶりを示す事例でしょう

伊志見一里塚、輪転式一切経経蔵、木幡家住宅、木幡山荘



写3 宍道町に残る検地帳

古代特殊横帯文銅鐸

(県指定文化財)

〔銅 鐸 と は〕

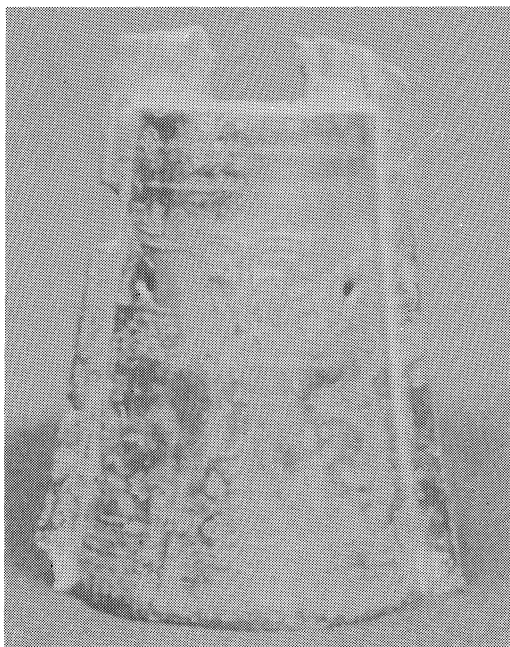
銅鐸は弥生時代（紀元前2、3世紀～紀元3世紀末）の青銅器です。鐘を押しつぶしたような筒型で、上部から下部にかけて、すそ広がりになっています。頭部に半円形つまみを付け、身の両側に薄いひれが付いています。小さいものは高さ10cm前後ですが、新しくなるにつれて次第に大きくなり、1mに及ぶものも出現するようになりました。近畿地方を中心に、東は中部地方から西は北九州にまで分布しています。荒神谷遺跡（斐川町）からは一度に6個の銅鐸が見つかったのは記憶に新しいところです。

その用途については、本来は楽器だったとおもわれますが、青銅製品の珍しかった当時の日本では、農耕などのお祭りと結び付いた神器に利用されたと推定されています。

〔古代特殊横帯文銅鐸〕

島根県東部出土と推定されるこの銅鐸は、高さ約25cm（復元高）とやや小振りですが、銅鐸の中では古い型式のものです。身の両面とも緩杉文の文様帯が上、中、下と3段ありますが、一方の面の上帯と中帯の間には「邪視文」が、中帯と下帯の間には「水鳥文」が描かれています。この邪視文を持つ銅鐸を邪視文銅鐸（福田式銅鐸）と呼び、中国地方では4例ほど発見されています。

昭和37年6月、島根県の指定文化財となりました。



写4 古代特殊横帯文銅鐸

しい やま 椎山1号墳

(県指定文化財)

[椎山古墳群]

椎山古墳群は前方後円墳1基、方墳3基よりなるもので、白石の谷が奥に曲がりながら細長くはいりこむ、その中ほどにある低丘陵上に立地しています。前方後円墳である1号墳は丘陵の最高部に位置し、そこから北東にのびる尾根筋に向かって2号墳、3号墳、4号墳と並んでいます。

しい やま [椎山 1号墳]

1号墳は丘陵頂上のかなり広い平坦面に築造されている前方後円墳です。規模は全長35m、前方部先端の幅18m、前方部の高さ3m、くびれ部の幅8m、後円部の直径18m、後円部の高さ3.5mをはかります。

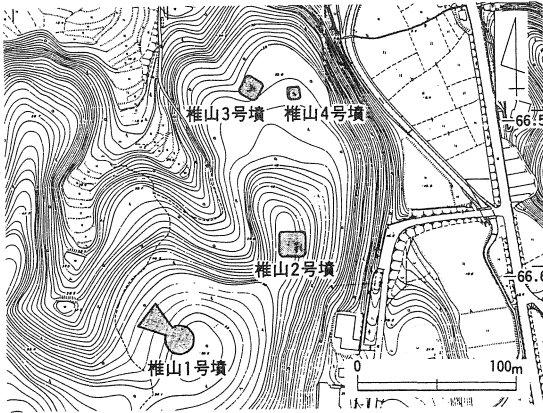


図4 椎山古墳群の分布

人を埋葬した施設は過去に盗掘にあっており、盗掘痕が前方部に2ヶ所、後円部に1ヶ所認められています。後円部の盗掘痕には大きな加工石が散乱してお

り、このことより埋葬施設は横穴式石室だったと考えられています。

遺物の大半は盗掘時に持ち去られたとおもわれますが、墳丘にめぐらしたと考えられる埴輪の破片がみつかっています。

い が み 伊賀見 1号墳

(町指定文化財)

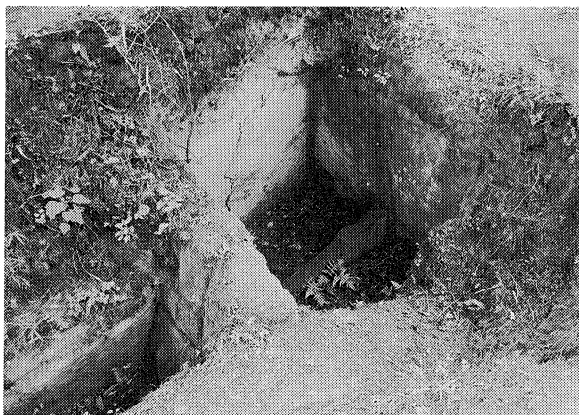
白石の谷の北端、標高約20mの低丘陵にある伊賀見古墳群の1基で、内部に「石棺式石室」とよばれる横穴式石室をもっています。昭和33年に発掘調査がおこなわれ、多くの遺物が出土しています。

墳 丘

墳丘は、一辺約10mの方墳と考えられていましたが、2号墳とされている部分が1号墳の前方部で、全長約25mの前方後方墳となる可能性が強いとされます。

石 室

石室は、ほぼ北向きに開口しており、細長い羨道の奥に死者を葬る玄室があります。石材はすべて来待石（凝灰質砂岩）を使用しており、羨道と玄室の間には、高さ約60cm、幅約60cmにくり抜いた玄門があり、閉塞用の石がそのまま残っています。閉塞石の表面には「十」状の陽刻が浮き彫りにされており、宍道町では他にも下の空古墳、鏡北廻古墳で類例が知られているところです。玄室は奥行き1.8m、幅1.9m、高さ1.7mの大きさで、床には「U」字状の浅いくり込みをもつ屍障仕切り石を据えています。



副 葬 品

副葬品として須恵器の壺をはじめ、銀管、刀子、鉄鏃などが出土しています。

写5 伊賀見1号墳の石室

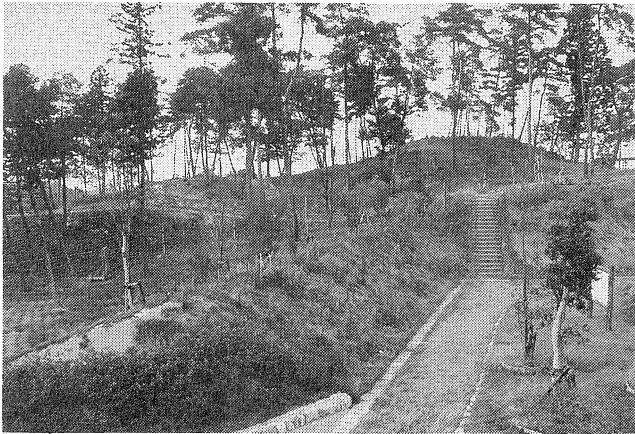
〔造られた時期〕

副葬品からみると、伊賀見1号墳の築造時期は6世紀の中頃と推定され、その石室形態より古天神古墳（松江市大草町）と並び、山陰地方に最初に導入された石棺式石室の一つであると考えられます。

みず たまり こ ふん ぐん
水溜古墳群

水溜古墳群は昭和59年の分布調査によって発見された古墳群で、現在のところ、約14haの範囲に30基が確認されています。地元の人の話では水溜5号墳の北側に「くぼち」があり、雨などが降ると水が溜まるので「水溜」の地名がついたといわれています。

昭和62年、水溜5号墳、30号墳の調査がおこなわれ、多くのことが



写6 古墳の森（右側の墳丘が水溜5号墳）

わかりました。群中で最大規模の5号墳は一边約25m、二段築成の方墳で、周囲に埴輪をめぐらした5世紀後半の古墳であること、30号墳は一边約14mの方墳であることがわかりました。

また、となりの現島根中央家畜市場では昭和59年の発掘調査により、弥生時代から古墳時代にかけてのお墓と、その時代の建物跡がみつかっています。ですから、水溜古墳群は弥生時代から古墳時代にかけて作り続けられたお墓群ということができましよう。

宍道町総合公園にある「古墳の森」は水溜古墳群の一部を取り入れて、古墳を身近に学習できるようになっています。

随音寺横穴墓群

菟古館の東側にある2つの穴が随音寺横穴墓群です。上にあるものが1号穴で、下にあるものが2号穴です。

横穴墓は古墳時代（4世紀～7世紀前半）に造られた有力者のお墓で、一つの穴に数世代にわたって葬る例もあることから、家族墓的な性格をもっているといわれています。普通は泥山に掘り込みますが、随音寺横穴墓群は岩肌いわはだに掘り込んである珍しいものです。

1号穴は岩に家の形をかたどってきれいに掘りこまれており、中からは須恵器の蓋が出土しました。この須恵器は7世紀の初めに作られたもので、横穴の掘りこまれたのも7世紀の初めごろのことと推定されま
す。

2号穴は昔より
子供の遊び場や酒
の製造などがおこ
なわれていたらし
く、かなりいたん
でいました。

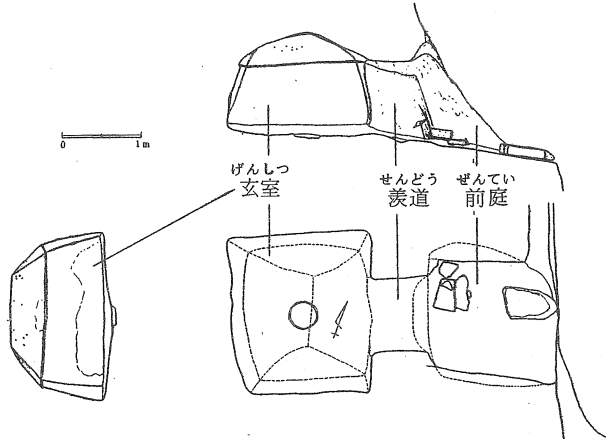


図5 随音寺 1号墳

いぬ いし ・ しし いし 犬石・猪石

(町指定文化財)

いし みや じん じゃ [石宮神社]

宍道湖岸より同道川^{どうどうがわ}を南にさかのぼること約200mに位置する石宮神社は、「出雲国風土記」(733年編纂)に宍道社と記されており、祭神として出雲大社と同様、大穴持命(オオナモチノミコト=大国主^{おおくにぬし}命^{のみこと})をまつています。この神社にある3個の巨石は「出雲国風土記」に記された「犬石」・「猪石」であろうと推定されています。

[犬石・猪石]

「出雲国風土記」
 では、大穴持命が
 犬を使って猪狩り
 りをしていたとこ
 ろ、その犬と猪が
 石に転じたという
 神話を残し、「宍
 道」の地名由来と
 しています。風土



写7 猪石（鳥居の両側）と石宮神社

記研究家の加藤義

成氏もこの「犬石」・「猪石」が石宮神社にある3個の巨石に相当するものとし、風土記に記された石の寸法と一致するとされています。

なお、犬、猪の伝承は、大穴持と犬について播磨国風土記（伊和の里）に、犬と猪のたたかいについて播磨国風土記（託賀郡）に、大穴持を焼き殺した「赤猪石（鳥取県）」について古事記に記されています。

附 「出雲国風土記」より

宍道郷。郡家の正西三十七里なり。所造天下大神命の追ひ給ひし猪の像、南の山に二つあり。[一つは長さ二丈七尺、高さ一丈、周り五丈七尺。一つは長さ二丈五尺、高さ八尺、周り四丈一尺。]

しし 猪を追ひし犬の^{かた}像、〔長さ一丈、高さ四尺、周り一丈九尺。〕其の
形石となりて、猪と犬とに異なることなし。今に至りても^{なほ}猶あり。
^{かれ}故、宍道と云う。

(加藤義成『校注出雲国風土記』より)

もくぞう び しゃもんてんりつぞう
木造毘沙門天立像

(町指定文化財)

〔木造毘沙門天立像〕

びしゃもんてんりつぞう 毘沙門天立像は大字白石の岩谷にある鞍馬寺に安置されています。
この像は大^{だい}同元年(806)、京^{やまし}都山代^{くら}の国の鞍馬寺にあった毘沙門天に
おまいりし、^{ぶんれいぞう}分霊像をもちかえったと伝えられています。^{むろまち}室町時代の
おわり頃、^{かなやまようがいさん}金山要害山の^{じょうしゅ}城主、^{まさよし}宍道政慶が像を^{すうはい}崇拜して^{どう}堂を^{しゅうふく}修復し、
さらに^{てんしょう}天正11年(1583)に^{なりたひこじろう}成田彦次郎が^{おおだんな}大壇那となって^{さいこう}再興したと伝
えます。その後、^{えど}江戸時代になると堂とともに像もいたんできたため、
^{きょうほう}享保14年(1729)に寺主の大用は京で新しく作られた像を持ち帰り、
旧像と共に山上の^{おく}奥の^{いん}院にまつたということです。

昭和30年、島根県文化財合同調査が実施されたおり、奥の院の旧像
は伝承どおり^{へいあんまつ}平安末期の作と^{かんてい}鑑定されました。それにともない像の^{ほし}補
^{ゆう}修、^{ほきょう}補強がされ、下のお堂に^{あんち}安置されるようになりました。

[毘沙門天とは]



写8 木造毘沙門天立像

毘沙門天は四天王の一つ、多聞天のことで、四天王はもともとインドの守世神ですが、仏教に入ると仏法とそれに帰依する人を守護する守法神となりました。仏教の世界観では世界の中心にあるとされる須弥山の中腹の、四方の門を守る神となったとされます。

四天王像が仏像を安置する須弥壇の四方にあるのはこのためです。

おおのじろうざえもんのはか
伝大野次郎左衛門墓

(町指定文化財)

[伝大野次郎左衛門墓]

上来待大森神社より西南1kmの地点にある高台を大野原といいます。この高台にある県立わかたけ学園のとなりに、昔より大野次郎左衛門の墓と伝えられる大五輪塔があります。これは来待石でできており、月山(広瀬町)にある堀尾吉晴(初代松江城主)の五輪塔より大きいものです。



写9 伝大野次郎左衛門墓

しかし、これが天正年間に薦ヶ
巢城（出雲市）の城主宍道政慶
（もと金山要害山の城主）に殺さ
れた大野村（松江市大野町）本宮
山城主の大野次郎左衛門墓とする
のは疑問です。といいますのは、
殺されたのちに、その領地は当然
宍道氏のものになったと思われま
すので、このような壮大な墓を建
てることは不可能だったと考えら
れるのです。

もっとも、大野氏は代々次郎左
衛門といていましたので、本拠地である大野村の対岸であるこの地
も大野氏の勢力があって、先代の次郎左衛門を葬った墓、或いは
供養塔だったかもしれません。

〔伝大野次郎左衛門墓をめぐる顛末記〕

昭和63年1月4日、正月気分もまださめやらぬときでした。或る東京在住の方が「伝大野次郎左衛門の墓」とする五輪塔についてびっくりするようなことを伝えてこられたのです。

その方の話しによりますと……………実は、私の祖先は土御門親王で、親王の墓は大野原の大五輪塔と先祖代々伝えるところである。そ

の証拠に家系図にそのことが記してあるし、出雲市四絡^{よつがわ}の満願寺^{まんがんじ}の過去帳にも同様の事が記してある。しかるに先年大野原の五輪塔へお参りしたところ、看板が立っており、「伝大野次郎左衛門墓」とされていたが、これはおかしいのでは……。とのことでした。

今まで「土御門親王の墓」と伝えるものは来迎寺の裏にある宝篋印塔^{ほうきやくいんとう}と聞いておりましたので、驚いた教育委員会では関係書類を調べるとともに、出雲の満願寺にでかけ、その過去帳を見せてもらいました。そこには確かに「先祖土御門親王尊祇文殊院殿正月七日御卒去 御墓意宇郡来待村大野原二大五輪塔二梵字あり……………」と記してあったのです。

その後1月8日には、東京からご本人が家系図等をご持参のうえ来町なされたのですが、ご持参の家系図にある五輪塔の記述は先の過去帳と同じもので、どちらかが後に書き写したものと思われるものでした。

では、なぜ五輪塔を「大野次郎左衛門墓」と伝えるようになったのでしょうか。文献を当たってみますと、雲陽誌^{うんようし}（享保2年、1717）の東来待の条に「来迎寺……（前略）…土御門の尊碑なりとて本堂の南にあり。由知れず。……」「古廟……土俗伝えて伝土御門の陵なりと。いまだ考えず。」との記述が。また、島根県史（昭和2年）には「来海庄^{きまちのしょう}……この庄は意宇郡来待村の部に相当し、大覚寺統の初めなる亀山天皇より後宇多、後醍醐の諸帝に伝はり、南朝系諸帝の御料地なり…（中略）…此る因由あるをもって東来待には大五輪塔ありて土御

門帝の御陵なりと言ひ伝えたるもの現存す。雲陽誌東来待の條に……（前述の雲陽誌「古廟」を引用）……とあるは帝室御料地なる故に親王家などの下降ありて終に此の處にて葬せられし古伝ならん…（後略）」と記してあります。

ところが、八東郡誌になりますと、地元の伝承を理由にして、この五輪塔を大野次郎左衛門じろうざえもんの墓として扱っています。また、宍道町誌（昭和38年）も「大野原古墳墓……（前略）…県立八雲学院に隣接するところに大野次郎左衛門おおのじろうざえもんの墓はかと称する、高さ3米餘の大五輪塔がある。…（後略）…」 「土御門親王の墓……来待地区字浜の阿彌陀堂（来迎寺跡）の南方、鉄道に接近した東来待連田の中に古墳があり、土御門親王の墓と称している。…（後略）…」と記しており、雲陽誌、島根県史を参考にしながらも、なぜか地元の伝承を根拠に大野原の五輪塔を大野氏ゆかりの墓に、来迎寺裏の宝篋印塔を土御門親王の墓と位置付けています。

以上のようにみていきますと、雲陽誌、島根県史はこの五輪塔の主が土御門親王を彷彿ほうぶつさせるような記述をしており、一方、八東郡誌、宍道町誌は大野氏にまつわる墓と考えているようです。何ともいえず不思議なことです。この五輪塔はいったいだれのお墓なのでしょう
か？

もくぞうあみだにょらいぞう
木造阿弥陀如来像

(町指定文化財)

[木造阿弥陀如来像]

木造阿弥陀如来像は、浜西（東来待）のJR山陰本線と国道9号線の間にある小さなお堂に安置されており、もとは、来迎寺と呼ばれる大きなお寺の仏像であったと考えられます。

像は鎌倉時代の作と考えられ、高さ1.5mで二重の六角形の台座の上に蓮華台があり、その上に座像がのっています。座像は高さ80cmで方珠形の後背がついており、もともと金色に彩られた仏像だったようで、今でも金箔の一部がのこっています。頭部には肉髻、螺髪、額には白毫、目には玉眼、首には三道、身には納衣をまとう典型的な阿弥陀如来象です。

堂内には他にも菊花の紋章入りの位牌があり、「当寺開基文珠院殿土御門親王尊位」と刻ざまれています。そして、鉄道をはさんで堂の南側には土御門親王の墓と伝える方籠印塔が残っています。（伝大野次郎左衛門墓の項参照）



写10 木造阿弥陀如来像

あ み だ に よ ら い
〔阿弥陀如来とは〕

ぶつぎょう ごくらくじょうど きょうしゅ ほんご
仏教で西方極楽浄土の教主をいいます。梵語の a m i (アミ) の音
やく むりょうじゅ むりょうこう かんやく ごくらくじょうど ねが しんこう
訳で無量寿、無量光と漢訳されます。極楽浄土を願うものが信仰し、
じょうどしゅう しんしゅう ほんぞん なら
浄土宗、真宗の本尊となります。阿弥陀信仰は奈良時代にそのきざし
がみられ、へいあん こうき (10世紀頃) の社会不安に伴い、まつぼうしそろう
浸透とともにしだいに広まっていきました。

しんじいよのか みいぶつ くじょうおおげさ
宍道伊予守遺物九条大袈裟

(町指定文化財)

しんじし
〔宍道氏について〕

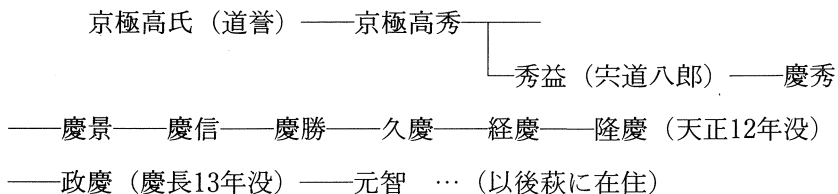
いずもしゅごきょうごくたかうじ ひでます ほちろう
宍道氏は出雲守護京極高氏の孫秀益が「宍道八郎」と称したのに始
まります。室町幕府の中で役職をつとめつつ、戦国大名あまご氏の有力
家臣として姻戚関係をもつなど、大きな勢力をもっていました。宍道
いんせき
氏一族には「宍道八郎(本家)」を名乗る家系のほかにも「宍道ろくろう」、
「宍道くろう」を称する家系があったことが知られています。

てんもん よしたか
天文11年(1542)大内義隆が尼子氏を攻めるために出雲に進出して
くると宍道隆慶(八郎家)は大内氏に従いますが、これが失敗に終る
と隆慶は大内氏とともにちようしゅうに移りました。その後大内氏が滅亡する
と毛利氏に従身し、再び尼子氏攻めに加わります。

えいろく まさよし
永禄9年(1566)、尼子氏が敗れると、宍道隆慶、政隆親子は毛利
氏により旧所領を安堵され、かなやまようがいさん
金山要害山周辺を拠点とし他の宍道一族や
りょうしゅそう かしんだん
周辺の領主層を家臣団に組み込んだ強力な支配体制をつくりました。

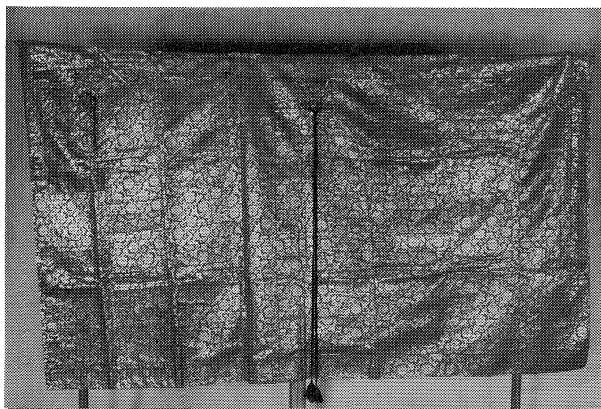
宍道政慶はその後天正二十年（1592）頃、毛利氏の政策により長門国阿武郡に移封させられており、豊臣秀吉の朝鮮出兵にあたっては新しい領地から出軍したことが知られています。

宍道氏系図



[宍道伊予守遺物九条大袈裟]

現在、金山の豊龍寺には金欄の袈裟が寺宝として残されており、それにまつわる興味深い逸話が残されています。それは、宍道政慶が天正20年頃、長州に移る際、宍道の豪家小豆屋（現当主小豆沢良久氏）



写11 宍道伊予守遺物九条大袈裟

へ一人娘を預け、その証拠として「太刀」と「金欄の打掛」を残したのですが、小豆屋は城主の娘を世継ぎとし、娘が成人すると「金欄の打掛」を袈裟に仕立て直

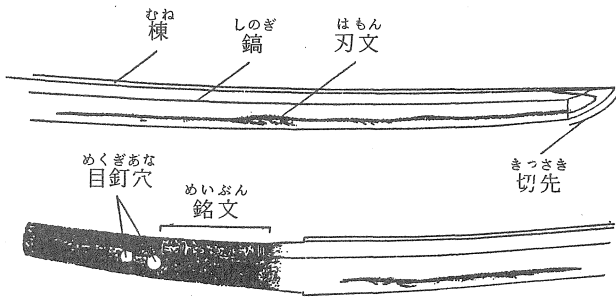
し、宍道氏の菩提寺である豊龍寺に寄進したというのです。そして、これが現在も残る金欄の大袈裟です。

袈裟は唐の織物で金欄の布切れ74枚を持って仕立てられ、たて一方132cm、もう一方116cm、よこ212cmの金色まばゆいものです。小豆沢家では代がわりの際には袈裟の裏地を取替え、仕立て直すようになったと伝えられています。

さんじょうむねちかめいたち
三条宗近銘太刀

(町指定文化財)

宍道政慶は金山要害山を本城とし、周辺の地を支配する有力な武将でした。政慶はその後天正二十年(1592)頃、毛利氏の政策により長門国阿武郡に移封させられています。この折りのことといわれる逸話が伝わっています。



それによると政慶には3才のひとり娘があり、これをつれていくには忍びないとして、宍道のご豪家小豆家に預け、養育を委託しました。

図6 三条宗近銘太刀の押し形(安部吉弘氏製作)

その際、証拠として「三条宗近銘太刀」^{ひとふり}一振りと金欄の「打掛」^{きんらん}を添え届けたといえます。

2つの品のうち「内掛」は後に袈裟に仕立てられて豊龍寺に寄進されましたが、太刀は小豆屋の後裔小豆沢家に伝わっています。

刀は長さ二尺四寸五分（74.2cm）、反り一寸一分（3.3cm）、元幅一寸弱（3.1cm）、先幅五分半（1.7cm）、重ね（厚さ）二分弱（0.6cm）です。造込は鑄造^{しやくすん}、棟^ぶで身幅はやや細く、小切先^{かさ}となっています。刃文は中直刃小乱で、地鉄は小板目が詰み沈んでいます。中心は^{つくりこみ}磨上中心で、目釘穴は二つ、鑢目^{いおりむね}は不明で栗尻^{こぎっさき}となっています。そして『三条□□宗近』と銘が切^{じんもん}ってあります。制作年代は室町時代と考^{なかご}えられています。

かな やま よう がい さん 金山要害山

金山要害山（坂口要害山ともよばれている）は、宍道町南部の丘陵先端^{さかぐち}を加工した中世の城跡です。出雲守護京極高氏の孫秀益が城を築いて宍道八郎と号した応仁年間頃より、この地方で勢力を誇った歴代宍道氏の本拠^{ほんきよ}でした。

海拔148mの山頂には詰成^{かいはつ}と呼ばれる平坦面が広がり、ここからは宍道湖および北山一帯の連山は手にとるがごとく、また、その支城といわれる宍道要害山、佐々布要害山は指呼^{つめなり}の間にあり、さらに鳶ヶ巢城と遙かに呼応した戦略上絶好の位置にあります。

城としての防備は宍道湖を望む北西面に重点をおいており、地元で二ノ成、御居出成、茶臼成、出張成、天狗成、長成、来海成、椎木成などと呼ぶ平坦地（郭）が点在しています。全山にあるこうした平坦地（郭）はその数が多いことから四十八成といわれ、周囲にも城跡に関連する地名を多数残しています。城の南面は急な斜面ですが、その下方には水を引いた溜め池の跡があり、坂口谷（坂口）の奥にある墨香池、比丘尼ヶ池から延々と水路を引き、水を導いたといいます。現在でも水路跡と伝える溝が比丘尼池から要害山まで続いています。

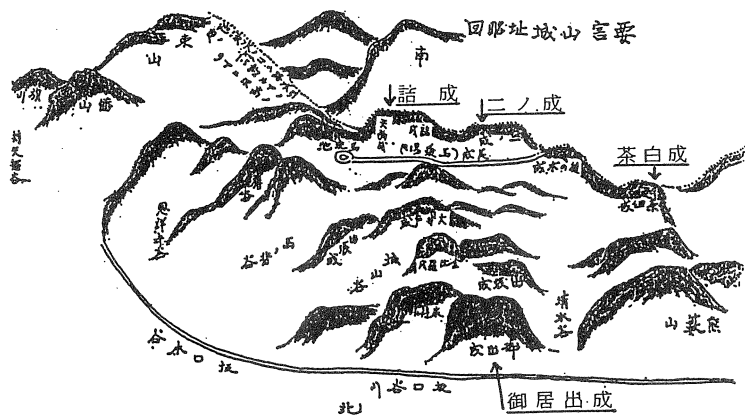


図7 金山要害山の古図

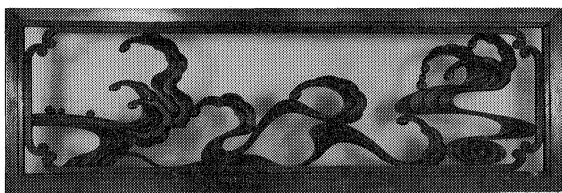
古城には様々な伝承がありがちですが、金山要害山周辺についても例外ではありません。宍道政慶の長州移封の際に宍道の小豆屋に自分の娘とともに太刀と金欄の打掛（後に袈裟に仕立てて豊龍寺に寄進）を預けたという逸話、廃城の際に白樫の下に財宝を埋めたという「白樫伝説」、兵糧攻めの際に灰と小豆を混ぜて馬を洗って見せたという「馬洗い伝説」などが語り継がれているのは興味をひくところです。

もくせい は どうもんすかしほりらんま
木製波涛文透彫欄間

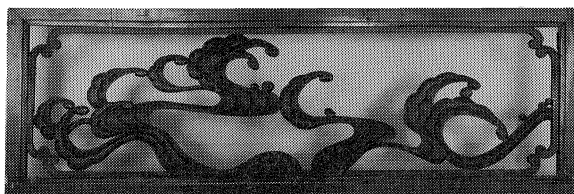
(町指定文化財)

地方ではまれな古作にして優秀な、檜作りの欄間が町内の古川氏の宅にあります。この欄間の伝来は欄間の柵の側面に、元所有者により次のように記してあります。

「元直地、庄屋、下森庄屋より伝い居る物 永田家迄凡三百年位



大正九年神崎家
三代目神崎儀三郎
買入 此作人儀三
郎」



(下森家、永田家、
神崎家はいずれも
津和野の旧家)
さらに片方の側面
には「大工…助」

写12 木製波涛文透彫欄間

と記してありましたが、^{かおく}現家屋に取り付ける際、^{けず}大工に削り落とされたため^{ぼくしよ}墨書の…助に当たるところの作人が不明になったそうで、大変残念なことです。

しかし、その^{ゆうき}雄揮な^{とうほう}刀法と^{こしよく}古色豊かな^{かくちよう}格調は、この^{つわの}欄間が津和野に伝わっていたことから考えて、^{おおうち}山口に残る^{えいきよう}大内文化の影響と見ることができ、^{かま}大内氏が^{せんごく}山口に城を構えた^{せんごく}戦国時代に作られたものとも考えられています。

く と せんたいじぞう 久戸千体地蔵

(町指定文化財)

く と せんたいじぞう 〔久戸千体地蔵〕

実道湖を来待川に沿ってさかのぼること約1 km、川の右岸に接する丘陵斜面に彫り込こまれた112体の磨崖仏を、地元では昔より久戸千^{たいじぞう}体地蔵と呼んでいます。

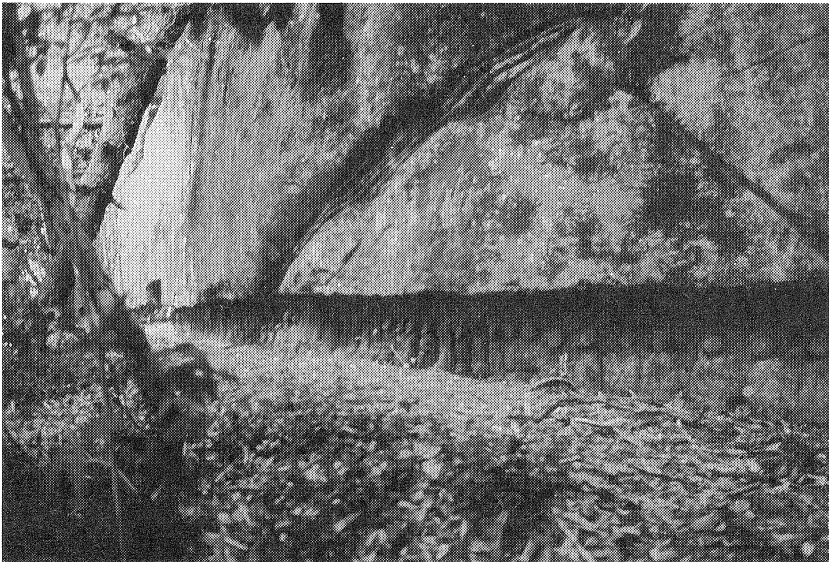
^{なんしつ}軟質の来待石に掘り込まれており、それぞれの像は高さ約70cmの^{せつ}石窟の中に高さ約50cm前後で^{うき}浮き^ぼ彫りされています。「千体地蔵」の名前が示すようにこれらの^{ぶつぞうぐん}仏像群すべてが^{じぞう ぼさつ}地蔵菩薩でしょうが、よく見ると、6体の^{いしきてき}仏像を^{なら}意識的に並べたものがあり、^{ろくじぞうしんこう}六地蔵信仰の^{えい}影響^{きよう}がうかがえます。

地元の伝承によれば^{へだ}水田を隔てた^{ちようじゅ}西側の^{こんりゆう}集落の^{さか}長者の^{さか}建立と伝えられますが、いつ、だれが、なぜここに掘り込んだのでしょうか。今では^{めいかく}明確な答えを出すことはできません。しかし、^{さか}地蔵信仰の^{さか}盛んにな

る室町時代から江戸時代の間、ここに生きた人々の信仰によって彫り込まれていったのは間違いないことでしょう。

[地蔵菩薩とは]

そもそも地蔵菩薩は、釈迦の入滅後、次の弥勒菩薩が出現するまでの無仏時代、五十六億七千万年の間に出現し、六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）の衆生を教化救済する仏といわれ、その名称は大地を所有するものとの意味です。六地蔵という形で6体の像を並べるのもこのためでしょう。なにごととも願いのかなう有難い仏様として、平安時代から信仰が盛んになり、江戸時代には賽の河原信仰と結びついています。



写13 久戸千体地蔵

伊志見一里塚

(国指定文化財)

〔一里塚とは〕

一里塚は街道の両側に、一里（約4km）ごとに設けられた塚のことです。多くはその上にえのき、松を植えて旅人の目印としました。戦国時代の終りごろにはすでに用いられましたが、慶長9年（1604）幕府の布達により東海道を始めとする主な街道で整備されるようになりました。しかし、明治時代にはいると、交通機関の発達、道路の拡張などにより、徐々に取りのぞかれていったのです。

〔伊志見一里塚〕

山陰道にも一里塚が設けられましたが、その名残りの一つが伊志見一里塚です。伊志見一里塚は松江城下から5里（約20km）の地点にありますので、もともと松江までの間にまだ3ヶ所の一里塚があったはずですし、伊志見一里塚の東約4km（現雲南石油の横）には「一里塚」の地名が残っています。鳥根県下では、この伊志見一里塚、安来一



写14 伊志見一里塚（昭和11年9月）

里塚（安来市安来町）、出西・伊波野一里塚（斐川町出西・伊波野）の3つが国指定文化財として保存されています。

塚は旧道をはさんで南北にあり、北塚は直径約5m、高さ約2mで往時の一里塚松の根元が残っています。南塚は直径6m、高さ2mになります。

りんてんしきいっさいきょうぎょうぞう
輪転式一切経経蔵

（町指定文化財）

うん しょう じ
[雲松寺]

雲松寺は曹洞宗豊龍寺（宍道町金山）の末寺で、山号を海運山と称します。寺の縁起は明らかではありませんが、室町時代の文明年間（1469年～87年）に高丘玄勝和尚（豊龍寺二代目）によって中興され、曹洞宗に改宗しています。

りんてんしきいっさいきょうぎょうぞう
[輪転式一切経経蔵]

記録によると、江戸時代の享保年間（1716年～36年）に、住職の恵運和尚は一切経をもらいうけ、その後、天保年間（1830年～44年）に壇頭小豆沢氏より輪転式経蔵の寄進を受けて経を安置したとされています。

現在、経蔵は横4.5m、奥行き5.25m、高さ4mの土蔵に納められており、外部の風雨から守られています。中の輪転式経蔵は支柱台座の高さ1.1m、10角の経文庫は一角0.68mの周囲6.8m、高さ2.4mを

はかります。上部の周囲10角には般若心^{はんにかしんぎょう} 經^{かん}600卷、下部に3,100余卷の經文^{きょうもん しゅうごう}が収蔵されるもので、外部にはもともと彩色^{さいしよく ほどこ}が施されていたということです。

棟札^{むなふだ}によると、經蔵^{きょうぞう}は

「大工、棟梁^{とうりやう} 長谷川栄助、男 同名為市 石工^{いしく}、文重、

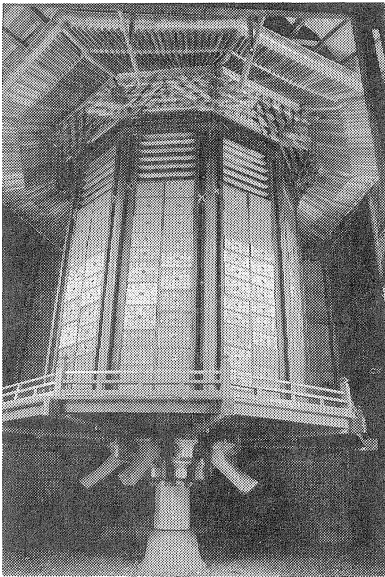
長年^{としより}、庄九郎 左官^{さかん}、五兵衛、

瓦師^{かわらし}、藤十（秋鹿邑） 木挽^{こびき}、

源助、小工、只兵衛、作蔵」

によって作られたことが知られています。

なお、この種の經蔵は全国的にも珍しい^{めづらし}もので、県内では邑智郡^{おおち}羽須美村^{はすみ}阿須那^{あすな}に伝えられるもののみです。



写15 輪転式一切経経蔵

附

一切經^{いっさいきやう}は「大藏經^{だいぞうきやう}」、「三藏聖經^{さんぞう}」ともいい、仏教^{せいてん}聖典の総集^{そうしゅう}です。經^{きやうりつ}、律^{りつ}、論^{ろん}に分かれており、經^{きやう}は釈迦^{しゃか}の説教^{せつきやうりつ}、律^{りつ}は教徒^{きやうと}の生活^{きてい}規定^{きぎやうぎ}、論^{ろん}は教義^{きやうぎ}に関する^{ちよさく} 仏教徒^{ぶつこうと}の著作^{ちよさく}のことです。

木幡家住宅

(国指定文化財)

[本陣宿と木幡家]

古来、宍道は交通の要衝として栄えてきましたが、江戸時代になると大名の立ち寄る本陣宿をもつ宿場町として発展しました。その本陣宿の一軒が木幡家で、その住宅は当時の威風を現代に伝えています。

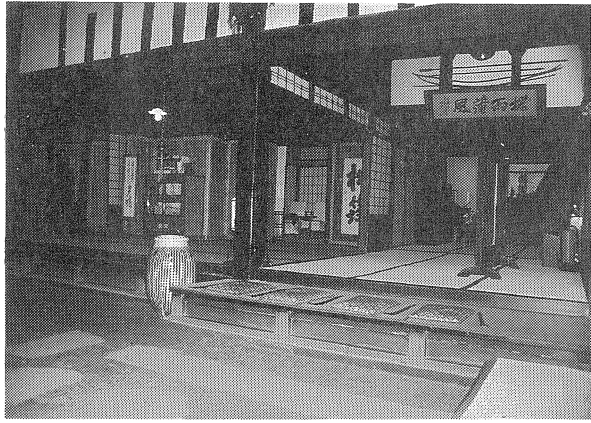
木幡家の先祖は山城国（今の京都府）宇治郡木幡村の出身で、大阪石山本願寺に隨身していましたが、織田信長の本願寺攻め（天正8年、1580）にあってより、戦乱を逃れて出雲に下り、宍道の地に定住したと伝えられています。江戸時代には農商の業を営みながら松江藩主に仕えて苗字帯刀を許され、意宇郡の下郡など郡役人を勤めて郡政治に参画するようになりました。

[木幡家住宅]

宍道町の中心部にあって旧山陰道に面しており、歴代藩主の藩内巡視などのおり本陣宿を務めました。

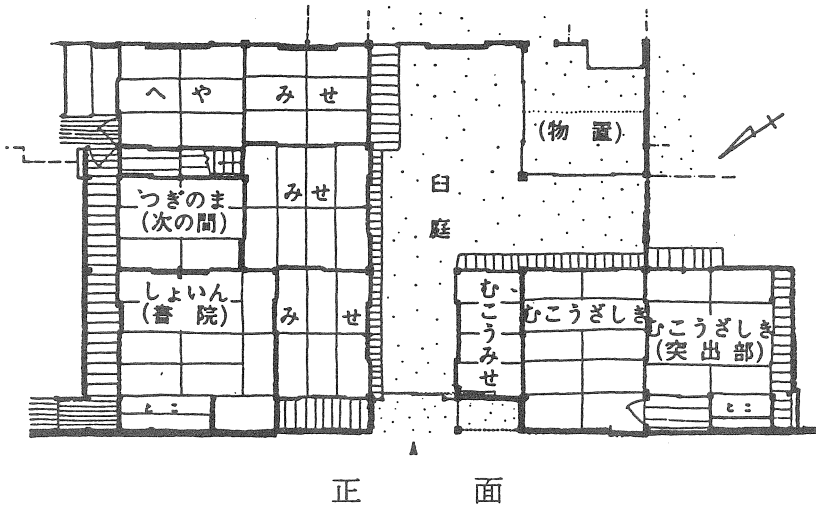
桁行8間半、梁間5間半におよぶ二階建の大型住居で、街道に面する外観は白壁をなし、本陣としての構えをよくしめしています。内部に入ると白庭と呼ばれる広い土間があり、左側の奥には藩主が居間として利用した書院が残されています。また白庭の上壁には青海文の描かれた採光窓や、私設消防隊の使った大団扇などが配置されています。

日本陣遺構と
しては母屋のみ
ですが、その保
存はよく、また
町家としても18
世紀前半〔享保
18年（1733）五
世与右衛門のこ
ろに建てるとの



写16 木幡家住宅の内部

記録がある]の貴重な資料として昭和44年6月20日、重要文化財（建造物）に指定されました。



正 面
図8 木幡家住宅の平面図

重要文化財木幡家住宅付属

大正天皇行在所「飛雲閣」

(町指定文化財)

明治40年5月、大正天皇が皇太子の頃、山陰行啓がありました。それまで山陰地方には御幸はもとより、行啓もありませんでしたので、東郷、乃木両將軍を随員に加えた長蛇の一行を沿道の住民はうち揃って迎えたといわれます。

この行啓にそなえて幕藩時代に本陣宿を営んでいた宍道木幡家では昼食を奉仕するため、御殿を用意するのですが、これが「飛雲閣」です。

建物は木造、平瓦葺、入母屋平屋建、平入り、式縁台、間口は9.1m、奥行きは8.2m、建坪75.9㎡、前庭247.5㎡、旧山陰道に面して間口3.5mの冠木門を設けています。



写17 飛 雲 閣

こ わた さん そう
木 幡 山 荘

(町指定文化財)

〔木 幡 山 荘〕

木幡山荘はJR宍道駅の南にあたり、宍道町菟古館に隣接しています。ここは随音寺というお寺の跡と伝えますが、今から400年ほど前に木幡家の別荘地となりました。

四世の浄意、妙蓮の夫妻はこの地に隠居し、百歳、九十二歳の高齢を得たことから木幡家では代々ここで老後を楽しむようになりました。また、歴代の当主は風雅を好んだため、江戸時代中頃から幕末、明治にかけては貫名海屋、広瀬旭荘、僧風外、僧物外、田能村直入を始め多くの文人墨客が来荘するようになりました。

明治の末、十三世久右衛門黄雨が山荘の建物を改修し、全国の古い寺社や名所旧蹟の古材を使用して、荘名を十千年荘となづけ、一般客、学生などに開放いたしました。

その後、昭和初年ごろから一時閉鎖されていましたが、昭和37年には吹月堂、調庵などを建て、ふたたび開放されるようになりました。昭和61年には菟古館の開館にあわせて荘内の整備をおこない広く一般に公開されるようになり、今では四季折々の風情を求める多くの観光客を集めています。

めいしょう
〔名勝〕 木幡山荘

此地、千年の古樹老木鬱蒼として枝を交え霊泉滾々として湧き、溪

水四時涼々の音を奏で^{ゆうきん}幽禽交々来り棲んで梢間に競鳴するため、街市を距る僅か数百メートルにして身は深山幽谷の境に在る懐がするところは他に類を見ない。荘内、楓、椿、藤、^{つっし}躑躅等の彩樹多く、四季の



写18 冬の木幡山荘

風趣各々棄て難いが、就中、新緑の候、天を衝く高幹老梢の間に隠顕する藤花が池畔を彩る躑躅と相映ずる景観と晩秋の候全山錦繡を織りなす紅葉の美観とは正

に絶佳で遠近の雅客の陸続杖を曳いて称揚するところである。

(木幡吹月 『宍道町の文化財』より)

^{すがわらみちざね}菅原道真と^{てんじん}天神さん

[菅原道真について]

菅原天満宮、菅原梅の木教会では菅原道真（^{しょうわ}承和12年～^{えんぎ}延喜3年、845～903）の^{しゅっせい}出生を伝えています。それによりますと菅原道真の父、^{これよし}是善が^{ざいにちゆう}出雲に在任中、菅原氏の祖先、^{のみのすくね}野見宿禰の^{たず}墓を訪ねて菅原の里に来られた折、そこで接待をした娘が気に入り、^{こくちょう}国庁（松江市大草

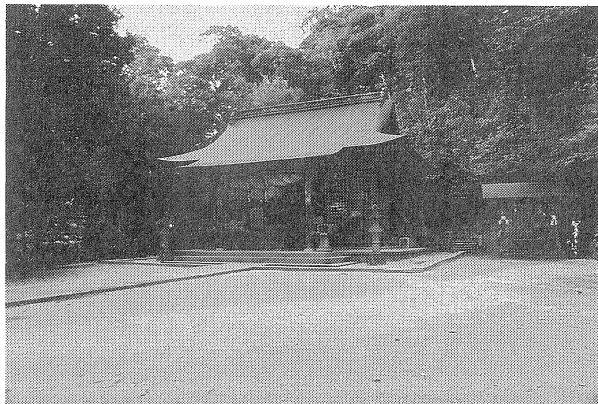
町)へ召めされます。是善にんきは任期きんきをおえ、京きょうに帰ることになるのですが、このとき既に女性すでは懐妊かいにんしており、菅原すがはらの地に帰って男の子をうみます。これが菅原道真と伝えられます。

その後、道真は京にのぼり、宇多うた、醍醐だいごの両天皇の信任を得て、右大臣だいじんにまで進みますが、時の権力者藤原時平ふしわらときひらの中傷ちゅうしょうにより太宰権帥だざいごんのそちとして九州太宰府だざいふに左遷させんされ、その地しよがいで生涯を終えます。

のちに、道真のたたりとする天変地異てんべんちいが続いて起こったためこれを鎮しずめるために神格化しんかくかされていきます。そして道真が学問がくもんをよくしたことから「学問の神 天神さん」として全国的に信仰を集めました。

すが はら てん まん ぐう 〔菅原天満宮〕

祭神さいしんは菅原道真で、祭日は3月25日と8月25日です。古来こらい、道真誕生たんじょうの地と伝え、天曆てんりやく5年(951)の創建そうけんと伝えます。松平直政まつだいらなおまさ(初代松江藩主)以来、代々藩主の信仰あつ厚く、『雲陽大数録うんようだいすうろく』では出雲国内の名社15のうちの一つに数えられています。扉には松平藩のお抱え絵師えし、狩野永雲のうえいの筆による



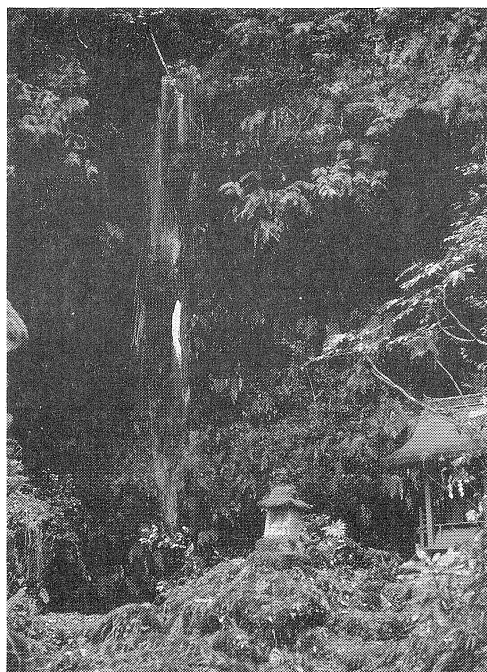
写19 菅原天満宮

双龍そうりゅうが描かれています。そして、近くには「鼻繰梅はなぐりのうめ」と称する伝説でんせつの木がありますが、その果実かじつには穴あながあいており、道真が子供の頃にこれで遊んだと伝えられています。

岩屋寺

〔岩屋寺〕

岩屋寺は真言宗大覚寺派しんごんしゅうだいかくじはに属ぞくし、山号さんごうを美滝山みたきさんと称えんします。寺の縁えん起ぎは明らかではありませんが、過去帳かこちょうをみると「第一世阿闍梨学尊、天和二年（1682）九月五日寂」と記されていますので、江戸時代えどの初めごろに中興ちゅうこうされたものでしょう。本尊ほんぞんは高さ40cmの弘法大師像こうぼうだいしぞう（木製）で、寺伝じでんによると弘法大師の自作じさくと伝えられています。



〔岩屋寺の特殊植物〕

宍道町には山野さんやが多く、

写20 岩屋寺の滝

特に来待地区の南側には植物がよく繁^{しげ}っており、種類も200種以上におよびます。とくに、この岩屋寺^{たき}の滝を中心とする周辺にはおよそ70種類の植物群^{しよくぶつぐん}がみられ、原生林^{げんせいりん}としては鱒淵寺^{がくえんじ}（平田市）、立久恵峡（出雲市）につぐものです。中でも「しだ」類がおおく、植物学的にも貴重な資料といえましょう。

妙岩寺

妙岩寺は大字佐々布本郷にあり、山号を亀鶴山^{きかくざん}といます。国道54号線から入ること約50m、数十段の石段を上ると老木鬱蒼^{うっそう}とした佳境^{かきよう}です。伽藍^{がらん}は文政4年の改築にかかり、高さ約15mの本堂^{ほんどう}は昭和62年11月に改築をおえ、なお一層の荘嚴^{そうごん}を極めています。本尊^{ほんぞん}は齒吹阿弥^{はぶきあみ}陀如来^{だにょらい}で、全国でも数少ないのものと伝えます。

境内は三面緑^{みどり}をもって覆^{おお}われ、庭園は自然の地形を利用して苔色豊かに、訪れるものの心を洗います。

また、峭立^{しょうりつ}する岩壁^{どうくつ}に洞窟^{どうくつ}が掘りこまれています。その中には芸術品と呼ぶにふさわしい十六羅漢^{じゅうろくわん}仏^{ぶつ}がたたずんでいます。

高台のこの地は眺望^{ちやうぼう}に富み、前面に宍道湖を見下ろし、一畑^{いちばた}、朝日^{あさひ}山の連山^{さん}が屏風^{びやうぶ}を広げたごとく見渡せるのは、湖山^{こさん}の景勝^{けいしょう}ここにありというにふさわしいところです。



写21 妙岩寺の十六羅漢

伝統的工芸 来待石の採石・加工

[来待石について]

宍道の地質は、^{かくせんせきくろうん も か こうがん くろうん も か こうがん}角閃石黒雲母花崗岩、^{せきえいはんがん}黒雲母花崗岩、^{はん}石英斑岩、^{がん}斑岩、^{たまづくり}玉造層、^{げん ぶ がんそう おおもりそう}玄武岩層、^{大森層}、^{ふつきせき あんざんがん}複輝石安山岩、^{きまちそう}来待層、^{の ぎ そう おき}乃木層、^{し そう}沖石層によって構成されていますが、いわゆる来待石（^{ぎょうかいしつざがん}凝灰質砂岩）は来待層に含まれるもので、石材、^{ようぎょう}窯業の原料として利用されています。

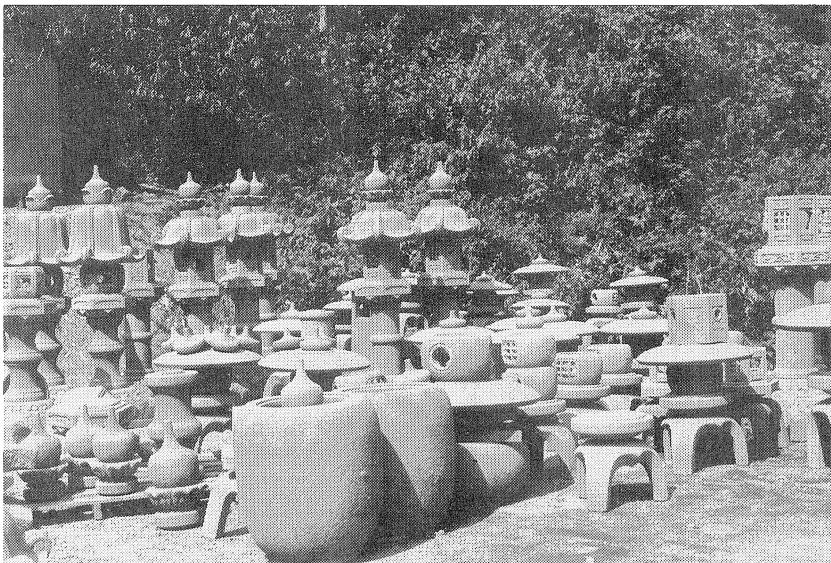
来待石は^{たい か せい}耐火性が極めて強く、^{さいせき}採石が極めて^{ようい}容易であるため、石材として古くは^{こふん}古墳時代の^{せつかん}石棺、^{せきしつ}石室に利用されており、その後も石仏、石灯ろう、^{からじし とりい}唐獅子、鳥居、石うす、石垣、礎石、墓石などに広く使用されてきました。特に江戸時代には^{えど}築城、^{ちくじょう}建築用の良材としてもてはや

され、他藩への搬出が制限されたため、御止石（おとめいし）という別名を残しています。

来待層は約1,400万年前に形成されたもので、水牛、サメなどの化石のほか、デスモスチルス、パレオパラドキシヤの化石がみつかっています。このデスモスチルスとパレオパラドキシヤはカバに似た水辺の動物で、全国でも数例しか発見されていない珍獣です。

〔伝統的工芸品 出雲石灯ろう〕

かつて、私達の身の回りでは着物、食器、住まい等にたくさんの伝統



写22 出荷を待つ石灯ろう

伝統的用具が使われていました。しかし、戦後の社会構造の変化、科学
 技術の進展により長い間培われた伝統的技術が徐々に失われる傾向に
 ありました。このような傾向を憂える人々によって昭和49年に「伝統
 的工艺品産業の振興に関する法律」が制定され、昭和51年6月には「出
 雲石灯ろう」がこの伝統的工艺品に指定されました。

おわりに

「地域の活性化」という言葉が語られて久しいのですが、私たちの
 宍道町も、まだなお活性化さるべき地域のひとつと考えます。地域の活
 性化には諸施設の整備とともに、地域を活性化させる「人の育成」を
 抜きにしては語れません。

地域を活性化させる「人の育成」ということは一朝一夕にできるも
 のではありませんが、地域の活性化を担う人は客観的に地域の歴史性
 と文化性を語れる人だと考えています。地域の歴史性と文化性を理解
 せずして、地域の将来を語ることはまず不可能でしょう。

このような「地域の歴史性と文化性の理解が、地域の活性化に密接
 にかかわる」との考えのもと、宍道町教育委員会では町内の文化財め
 ぐりを実施するようになりました。回数を重ね、案内する文化遺産も
 多くなったのですが、それらを説明する資料として簡単なパンフレッ

トのようなものを作りました。

最初のパンフレットは昭和60年、次いで63年と版を改訂し、記述内容も増やしていきました。そして今回の「ふるさと文庫」として内容を整えたわけです。

ですので「宍道町の文化財めぐり」という題名も、町内の文化財めぐりという、実際の活動から生まれたものですし、本書を手になさる方も、これを片手に町内の文化財を訪れてもらいたいです。

過去からの遺産である文化財は、単に昔のものというのではなく、現在から未来へと向う私たちにとって、大きな視座となると考えています。身近な文化財を自分の足で歩き、私たちの町のたどった歩みと、将来への歩みに想いを馳せていただければ幸に在じます。

最後になりましたが、本書の作成に御協力いただいた先輩諸氏に感謝申し上げます。

(本書の執筆、編集は教育委員会事務局の協力をえて、稲田 信がおこなった。)

宍道町のおもな文化財と展示施設

(番号は地図と一致します。)

番号	種 別	文化財の名称	所 在 地	所 有 者	指 定 年 月
----	-----	--------	-------	-------	---------

[国指定文化財]

1	史 跡	伊志見一里塚	伊志見44-1.2	大 蔵 省	昭和12年 6月
2	建 造 物	(重文)木幡家住宅	宍道1.335	木幡修介	昭和44年 6月

[県指定文化財]

3	考古資料	邪視文銅鐸	宍道1.335	財八雲本陣 記念財団	昭和37年 6月
4	史 跡	椎山1号墳	白石1.008	小豆沢芳正	昭和48年 9月

[町指定文化財]

5	建 造 物	飛 雲 閣	宍道1.335	木幡修介	昭和56年 4月
6	彫 刻	木造毘沙門天立像	白石 494	鞍馬寺	昭和56年 4月
7	彫 刻	木造阿彌陀如来像	東来待854	来迎寺	昭和56年 4月
8	彫 刻	木製波濤文透彫欄間	宍道1.445	古川育造	昭和56年 4月
9	工 芸 品	輪転式一切経経蔵	宍道919-1	雲松寺	昭和56年 4月
10	歴史資料	政慶遺物九条大袈裟	白石2.877	豊龍寺	昭和56年 4月
11	史 跡	犬石、猪石	白石 638	石宮神社	昭和56年 4月
12	史 跡	伝大野次郎左衛門墓	東来待2171-73	宍道町	昭和56年 4月
13	名 勝	木幡山荘	宍道279-3.992	記念財団	昭和56年 4月

14	工 芸 品	三 条 宗 近 銘 太 刀	宍道1.410	小豆沢良久	平成元年 7月
15	史 跡	伊 賀 見 1 号 墳	白石 3.994-1	持 田 克 己	平成元年 7月
16	史 跡	久 戸 千 体 地 蔵	東来待2.228-1	伊 藤 宣 明	平成元年 7月

[主な文化財]

17	史 跡	金 山 要 害 山	白石		
18	史跡名勝	菅原道真と天神さん	上来待	天満宮教会	
19	史跡名勝	岩 屋 寺	上来待1.131	岩 屋 寺	
20	史跡名勝	妙 岩 寺	佐々布513	妙 岩 寺	
21	史 跡	水 溜 古 墳 群	白石3.254-2	宍 道 町	
22	史 跡	随 音 寺 横 穴 墓 群	宍道1.715	宍 道 町	
23		来待石の採石場	来待		

[展示施設]

24	宍道町菟古館	宍道町宍道1.715-2	TEL 0852-66-3245
----	--------	--------------	------------------

穴道町の文化財地図



凡 例	
記号	説明
○	史跡
□	支所
卍	神社
卍	寺院
卍	学校
卍	警察署
卍	郵便局
卍	農協
卍	公民館
——	鉄道
——	道 三米以上
——	路 三米未満
——	小 径
▲	三角点
●	水没点
*	未点検標高

14. 三条宗近銘入刀
 2. 木橋家住宅
 5. 飛雲閣
 8. 木製波濤透彫欄間
 9. 輪転式一切経経蔵
 13. 木幡山荘
 24. 地蔵館

1. 伊志見一里塚

21. 水溜古墳群

20. 妙岩寺

10. 穴道御守政慶遺物九条大袈裟

17. 金山要害山

4. 椎山1号墳

15. 伊賀見1号墳

6. 木造毘沙門天立像

11. 犬石、猪石

7. 木造阿弥陀如来像

16. 穴戸千体地藏

19. 岩屋寺

12. 伝大野次郎左衛門墓

18. 菅原天満宮

宍道町歴史年表

赤字は宍道町のできごと

西 暦	時 代	島根県（宍道町）のできごと	全 国 の で き ごと	西 暦	時 代	島根県（宍道町）のできごと	全 国 の で き ごと
10,000	旧石器	押型土器が作り始められる 宍道湖湾の出現	各種の旧石器が作られる 土器作りが始まる 縄文海進が始まる	1,200	鎌	後鳥羽上皇、隠岐へ配流	承久の乱
	縄			1,300	倉	伝大野次郎左衛門墓造られる 後醍醐天皇、隠岐へ配流の後脱出	蒙古来襲（文永、弘安の役） 鎌倉幕府滅亡 室町幕府成立
1,000	文	弘長寺遺跡、三成遺跡等の形成		1,400	室	塩冶判官、白石灘で自害する（首塚） 尼子持久、守護代として富田城に入る 宍道八郎、金山要害山に本城を構える(伝)	応仁の乱（戦国時代へ）
200		日本海沿に弥生文化が伝播する	水稲耕作を基調とする弥生文化が広まる	1,500	町	尼子経久、富田城を追われるも、再度奪還 尼子最盛期（11ヶ国の太守） 大内義隆の尼子攻め 毛利元就の尼子攻め、富田城落城	鉄砲伝来 室町幕府滅亡 本能寺の変、秀吉の天下統一
BC 100	弥	銅鐸、銅剣祭祀が始まる（邪視文銅鐸）		1,600	安土、桃山		関ヶ原の合戦
AD 100	生	四隅突出墳丘墓が造られ始める	倭国大乱 卑弥呼が魏に朝貢する 大規模な墳丘墓の出現		江	堀尾吉晴、出雲に入る、宍道氏萩に移る 山陰道に一里塚設置 京極忠高、松江に入都 松平直政、松江に入都	
200		畿内型古墳が出現する	畿内を中心に統一勢力の形成、前方後円墳の出現	1,700		木幡山荘の整備 木幡家住宅建築	享保の改革
300	古				戸	松平治郷（不昧）、古今名物類聚を著す	寛政の改革 ラックスマン、根室に来航
400	墳	横穴式石室の導入（椎山1号墳→伊賀見1号墳） 横穴墓の導入（随音寺横穴）	須恵器の生産が始まる 筑紫国造磐井の乱	1,800		輪転式一切経経蔵の建立 妙岩寺十六羅漢造られる	天保の改革 日米修好通商条約の締結 大政奉還、王政復古の号令
500			聖徳太子、摂政となる		明 治	山陰鎮撫使、山陰に来る、廃藩置県	明治維新 学制頒布
600	飛鳥	出雲国庁ができる	平城京に都を置く 古事記、日本書記が成る	1,900	大 正	飛雲閣の建築 宍道一木次間、鉄道開設	大日本帝国憲法発布 第一次世界大戦始まる
700	奈良	出雲国風土記が成る、宍道郷の記述 出雲国分寺、尼寺が建立される	平安京に遷都 天台宗、真言宗が開かれる 菅原道真、大宰府へ左遷		昭 和	宍道、米待合併し、宍道町となる	日中戦争始まる 太平洋戦争始まる、敗戦
800			平将門、藤原純友の乱		平 成	宍道町菟古館の開館	高度経済成長
900	平	菅原天満宮の創立（伝） 出雲様式の仏像多数造られる 中世出雲国一宮制成立	藤原道長、摂聖となる				
1,000	安	毘沙門天立像が造られる	保元の乱、平治の乱 平家滅亡 鎌倉幕府成立				
1,100							

主な参考図書

島根県史	島根県
島根県地名辞典	角川書店
八束郡誌	郡誌刊行会
出雲国風土記参究	加藤義成
宍道町誌	宍道町
宍道町の文化財	宍道町教育委員会
宍道町埋蔵文化財調査報告1～8	宍道町教育委員会
宍道町歴史史料集	宍道町教育委員会

宍道町ふるさと文庫2

宍道町の文化財めぐり

1989年11月1日 第一刷発行

1995年3月31日 第五刷発行

発行 宍道町教育委員会
八束郡宍道町大字昭和1番地

印刷 柏木印刷有限公司
松江市国屋町452-2



宍道町教育委員会